

多和田裕司著『マレー・イスラームの人類学』ナカニシヤ出版、2005年、xii+230p.

久志本裕子（東京外国語大学大学院）

本書の目的は、現代マレーシアのマレー・ムスリム社会に見られる「イスラーム化」という社会的、文化的変化の過程を、イスラームの普遍的な理念、現代マレーシアという社会的・歴史的な現実、そしてその相互作用の中で「よりイスラーム的」であることを目指して個々のムスリムが生み出す実践、という三者の関係性に着目して提示することである。

ここで「イスラーム化」というキーワードが示すのは、ムスリムが「自らの行動や自らが生きる社会をもはやイスラーム本来の理念ではかけはなれたものであると認識し、そのうえで、ふたたびイスラームの理念にもとづいた行動や世界の構築に向かおうとする動き」（5頁）であり、一般に「イスラーム原理主義」「イスラーム復興」等と呼ばれる現象を包括する概念として使用される。

「人類学」と名のついた本書の特徴は、著者自身が述べているように「その対象が人類学という言葉によって一般に想起されるものを大きく踏み越えている」（iii頁）点にある。本書は主にクランタン州の村落において1987年から89年に実施された人類学的調査、およびその後現在までの短期調査にもとづいて記されたものであるが、その内容は「イスラーム化」に関する個々の事例紹介に集中するのではない。本書で試みられるのはむしろ、「大伝統」としてのイスラームの規範、あるいは国家という枠組みといった「より大きな文脈」へと「議論の『射程』を拡大」（ii頁）し、その中で各事例をつなぎ合わせることによって、「イスラーム化」現象を理解するための一般的視点を導くことなのである。

このような目的を持つ本書は、第二章と第五章を調査にもとづく村落レベルの事例の考察に、第三章、第四章をそれぞれ歴史的展開と国家の制度という「イスラーム化」の社会的文脈の提示に、第六章を州の政策というレベルの「イスラーム化」の事例の考察に充て、「射程」を伸縮しながら読み進める構成をとっている。

各章の内容は以下のとおりである。まず第一章「イスラームの人類学」においては、先行研究の検討の中から本書の課題が提示される。「イスラーム化」を「西洋」との対抗によって捉える従来の文明論的説明に不足しているのは、第一に、イスラームという「宗教」（10頁）自体に神の示した絶対的理念への指向性、すなわち「イスラーム化」の論理が内在するという点、第二にそれが具体的現実において「よりイスラーム的」であろうとする実践として発現する時、個々のムスリムの間には「差異」が存在すること、への配慮である。絶対的理念がありながらも現実の実践には「差異」が存在することによって、時代や状況によっては各ムスリムの間に「よりイスラーム的」であることを目指して「一方的に『競りあがって』」（15頁）行く状況が生じる。「イスラーム化」という社会的変化を理解するには、イスラームをなんらかの静態的な「実体」として捉えるのではなく、この普遍的な理念と個別具体的現実の相互作用という動態のメカニズムにこそ着目する必要がある。

第二章「マレー・イスラームの諸相」では、村落レベルの具体的事例を「マレー（マレーシア）」（35頁）に特殊な社会的文脈の中に配置しながら、イスラームの理念が具体化されるあり方について、三つの点を指摘している。第一にマレー・ムスリムがイスラームを解釈し実践する際の参照枠には、イスラームの絶対的理念に加えて、マレー社会固有の人間関係の規範（例えば「恥」）があり、これがマレー・イスラームに独自性を加えている。第二に、マレー社会におけるイスラームの役割として、ある人が「よりイスラーム的」であることが他者の実践に対しても「力」として作用し、社会的現実の中で相対的な「権威」の連鎖を形成する。第三に、マレーシアが多民族国家であるという「現実」に伴い、イスラームがマレー系と他の民族集団の差異をしめすものとして独自の強調点をもって解釈、説明されることがある。

第三章「マレーシアにおける『イスラーム化』の展開」では、マレー・イスラームの通時的变化を「イスラーム化」前後の社会的変化と合わせて論じ、「イスラーム化」のメカニズムを検討している。イスラームの普遍性を強調した20世紀初頭のイスラーム改革運動は、マレー・ナショナリズムの高揚の中で衰えていった。それが「イスラーム化」へ向いた社会的背景として、新経済政策の結果としてマレー系の都市への移動の活発化および地方開発政策によって、多様性を内包したマレー系「中間層」が拡大したことが指摘される。このマレー系の「力」の強化と内部の多様性にもとづく対立の噴出という社会的変化の文脈において、ダツク運動を引き金に絶対的善としてのイスラームが強調されたことにより、個々のマレー・ムスリムの間で「よりイスラーム的」であることを目指して争う状況が生まれた。「イスラーム化」とはそうした小さな「競りあがり」の総体としての社会変化であるといえる。

第四章「制度としてのマレー・イスラーム」では、ムスリムの実践を規定する要素としての国家の法制度と宗教行政を概観し、それが「イスラーム化」の中でやはり「よりイスラーム的」方向へ「競りあがる」ように変化していった様子が示される。独立以降、各州で徐々に整備されたイスラーム法制は、80年代に入ってイスラームの教義をより厳密に条文化し、かつより精緻な行政や裁判機構を確立する方向へと発展した。イスラームは州の管轄事項であるため、解釈および実施には「多様性」が生じうる。これが連邦と州、あるいは新興指導層と伝統的指導層の間の政治的ヘゲモニー争いと結びついたとき、複数の「権威」の間のイスラームをめぐる争いとして表出し、「よりイスラーム的」な方向への制度的変化として進展していくのである。

第五章「マレー村落社会における『イスラーム化』の実際」においては、再び村落レベルの事例を用いて、「イスラーム化」がイスラームの理念と社会的文脈の相互作用の中での解釈の積み重なりとして紡ぎだされる様子が描かれる。事例は1989年のある婚姻儀礼で、PAS支持者である新婦側のイマームが、UMNO支持者である新郎に対してイスラームの知識を公衆の面前で問い、答えられなかった新郎に「恥」をかかせたというものである。この事件をめぐる当事者の解釈の多くは、伝統的マレーの意味世界ではタブーであったこ

のような「恥」をかかせたことを批判するよりもむしろ、「よりイスラーム的」であろうという意識を強める機会として受け止められていた。伝統的規範を破るようなイマームの行為を、戸惑いながらも受け入れるような解釈がなされたという現実、80年代後半の政党間対立においてイスラームが「政治の道具」化されていく中で、イスラームの理念への指向性が強まりつつあったという社会的文脈において初めて理解できる。「イスラーム化」はこのように、イスラームの理念と社会的現実の相互作用の中で、個々の解釈と新たな現実の構築が積み重なって発生する。

第六章では、前章で示されたような理念と現実の相互作用の中で発生する「イスラーム化」が州の政治というレベルで考察される。事例として挙げられるのは酒類販売の禁止をめぐる争いである。1990年の総選挙においてクランタン州の政権の座に着いたPASは「イスラーム化」への政策をとりつつも、非ムスリムに対しては酒類の販売ライセンスを発行し続けていた。これをUMNO側が「非イスラーム的である」と非難して論争が起こり、92年にPASは酒類販売の禁止を強める決定を迫られた。イスラーム的「正しさ」の絶対性をいかに強調しても、一度政権の座につけば現実の政策においては常に理念から乖離した「妥協」を避けられない。そこには常に野党側から「非イスラーム的」と批判される余地が残るので、政治対立の激化に伴い「イスラーム化」が加速されることになる。

終章では、これまでに挙げられたひとりひとりの日常的行動から国家的政策にいたるまでの「イスラーム化」を理解する視点として、イスラームの教義と社会的現実の相互作用というモチーフが確認される。イスラームに内在する理念と現実の乖離という性質、そこから生み出される解釈、実践の差異が、マレー系内部の対立という社会的文脈なかで現れたとき、「よりイスラーム的」であることを目指して「競りあが」る状況が生じたのである。

マレーシアにおける「イスラーム化」に関しては、社会変化のレベルでも政策のレベルでも、すでに例を挙げるまでもなく無数の論考がある。にもかかわらず、イスラームを正面から扱ってマレーシアについて論じた日本語の書籍は本書が初めてである。しかしそれ以上に本書がマレーシア研究にとっても、イスラーム研究にとっても重要だと思われるのは、筆者が目的として示したように、普遍的なイスラームの理念と、日常生活から国家の政策までの実践をつなぎ合わせて論じる一つの視点を開いている点にある。本書以外の、特に政策の変化を論じた論考の多くは、経済的、政治的状況の変化に「イスラーム化」の理由を求めることはあっても、不思議なほどにイスラームに内在する論理という要素を忘れがちである。

ただ、あえてこの点から歯がゆさを感じる部分を一つ挙げるとすれば、それは理念が実現される社会的文脈の説明にPASとUMNOの政治対立が色濃く出されているがゆえに、「理念」を考慮し、争われるものが「イスラーム」以外のものではありえなかった要因を考えるという本書の特徴がかすんでしまっている点であろう。例えば第五章の冒頭(147-8頁)でごく簡単に触れられている、テレビやラジオ、チュラマー(宗教講話)など、(政党間対立を背景としているにしても)必ずしも直接的に政党政治を論じるとは限らない機会

の増加によって、幅広いイスラームの「理念」の中のどの部分が、どのように伝わり、イスラームへの意識の高まりを導いたのか、といった点がより厚く記述されてもよかったのではないかと思われる。

筆者の示す「理念と現実の相互作用」そしてその中で生じる「競争あがり」というモチーフは、一見言うまでもないと感じられるほどシンプルなものかもしれない。しかし、私事ながら今現在まさにマレー・ムスリムにとってのイスラームに関するフィールド調査の最中にある評者には、このモチーフが「彼らの解釈枠組み」の骨子を捉えようとする筆者の長期にわたる反芻の中で生み出された成果に感じられてならない。これを元にした議論、比較の可能性は幅広い。膨大な情報が200頁あまりに凝縮された本書からは、マレーシアのイスラームに関する基本的知識が確認できるのみならず、読み返すほどに新たに議論すべきことは何かが見えてくる。

#### 訂正のお知らせ

本誌第33号(2005年12月26日発行)の44~45ページに掲載された、西尾寛治会員ご執筆の新刊紹介(富沢寿勇『王権儀礼と国家:現代マレー社会における政治文化の範型』)につきまして訂正のご要望がありました。お手数ではございますが、以下のようにご訂正いただきますようお願い申し上げます。

(1) 44ページの表題の副題部分

(誤)「現代マレー社会における政治文化の原型」→(正)「現代マレー社会における政治文化の範型」

(2) 44ページの本文左側コラムの上から7行目

(誤)「政治文化の原型」→(正)「政治文化の範型」

(3) 44ページの本文左側コラムの下から2~1行目(目次の記述部分)

(誤)「第4章 ヌグリ・スンビラン王権神話の神話的構成」→(正)「第4章 ヌグリ・スンビラン王権の神話論的構成」